

STUDIO KOMA

Vol.1

The Mailgraph of Monthly Publication

2000.OCT.31

PHOTOGRAPHS WITH TEXT
TATSUANG/TATSUYA ATARASHI

©Tatsuya Atarashi 2000

TATSUANG

荒川源流 [秋の初めに]

全国に約30本あるという荒川。なかでも奥秩父・甲武信岳(2475メートル)に端を発し、東京湾へと注ぐ全長約169キロメートルのそれは、利根川、多摩川とともに関東平野を形成する大きな要因ともなり、周辺に暮らすおよそ2000万人もの人々の命を支える水源として、生活から切り離せない存在となっている。

近年、この荒川上流に浦山ダム、滝沢ダムとたて続けに大きなダム建設が進められている。狭い範囲に既存の二瀬ダムと合わせて三つのダムがひしめき合うことになる。

ここでいう荒川源流とはそれらダムの更に上流、主に入川溪谷、真ノ沢とその周辺の森を指す。今後、四季折々に通うことで少しずつ源流部の全体像を探っていきたい。それはまた、TATSUANG流自分探しの旅でもある。



真ノ沢を遡ると千丈の滝に出会う(表紙)滝の落ち口に伸びていた木に体を預けて撮った。ブナ(右)やカツラ(上)の幹を覆ったコケ類が源流部の雨の多さを語っている。アジアモンスーンの湿った空気が樹木や下草、地衣類などを育てる。





水源の森 二瀬ダムの上流、埼玉県大滝村川又で荒川本流は2つの川に分岐する。左又の滝川は雁坂嶺側から落ちる支流で、本流は右又の入川だ。川沿いにはかつて営林署が伐採のために設けたトロッコの軌道が残っている。昭和30年代まで全国至るところで自然林の伐採が盛んに進められていた。世界遺産に指定されている屋久島とて例外ではない。そのため荒川源流で比較的大きな樹木が残っているのは、甲武信岳から十字峠にかけての稜線付近と、そこから発生する深い谷沿い

だけとなっているようだ。したがって2000ヘクタールにも及ぶ広大な荒川源流部とはいえ、はたして原生林と言える森がどれだけあるのか、或いは無いのか。今後の取材のなかで明らかにしていきたい。

オオカミの気配 奥秩父の森林美は実に見事だ。関東平野から一気に突き上げた山々は太平洋気候の影響を受け、シラビソ、ツガなどの針葉樹の森が豊かに形成されている。下木にはシャクナゲが一面に繁茂し、鬱蒼とした森は夥しいコケ

類で覆われている。

わたしの知る限り、このような植生の広大な森は国内では富士山麓の青木ヶ原樹海とここだけだ。吉野熊野にもありそうだが、残念ながら未知の領域だ。しかも青木ヶ原は富士山の噴火にともなって形成された比較的新しい森で、奥秩父のほうはどうやら古そうだ。そのような森とそこかしこに発達した深い渓谷美が荒川源流の魅力と言える。

邪推だが幻のニホンオオカミも、ここなら生き残っているかも知れない、と思えてくる。

赤沢谷沿いにあるカツラの巨樹(右) 目通り5~6メートルはあるだろうか。もともと水辺を好む樹木だが、増水時には根元まで冠水するに違いない。その根の強さに驚かされる。源流深く向かうためには必ずこの木の脇を通らなければならない。その度に撮影するのだが、いつも表情が違う。木も水も宇宙のうねりに添って突き動かされている。荒川源流の森はツガ、シラビソなど針葉樹で覆われている。いわば黒い森だ。ブナやダケカンバ、ミズナラなどの落葉広葉樹もあるがそう多くはない。やはり太平洋の温暖な気候が影響しているのだろう。





真ノ沢周辺のガレ場にはシダ類(左)も多く見られる。キノコの類も至る所で見かけるが、いかんせん名前も判らず食する訳にもいかない。昆虫やクモなども含め自然界の生き物の名前を覚えるだけでもたいへんだ。同定も難しく、つい、何々類で済ませてしまう。せめて樹木だけでも覚えたいもの。

千丈の滝上段(20メートル)中央部まで側壁をローザイルで降りて目の前に滝を望む。滑ったらお終いだ、シャワーを浴びながらの撮影に気持ちも引き締まる。



秘瀑、千丈の滝 今回の取材は入川渓谷上流、真ノ沢から落ちる千丈の滝(上下二段・落差35メートル)に出会うことが第一の目的だ。アプローチが長く、溪流釣りや沢登りを楽しむごく限られた人たちが訪れる者もなく、わたし自身初めての対面となる。

10月の半ば、紅葉にはまだ早い入川渓谷を川又から半日ほど歩いて、真ノ沢沿いにある柳小屋(無人避難小屋)で一泊。翌朝十文字峠への一般登山道から外れ、踏み跡をたどり登ること2時間あまり。目指す千丈の滝に到着。樹木の間越しに滝の姿を拝み、何とか上部側壁に取り付き点を捜し、上段の滝中央部まで

行ってみる。

百聞は一見にしかず。この滝にお目にかかっただけでも豊かな森と、そこから溢れ出る水の力と、気の遠くなるほど長大な時間の流れを想像できる。

自然界の大いなる力を目の当たりにしたとき、人間は素直に謙虚な気持ちを抱かざるを得ない。また、そうすることで人類は今まで生き延びて来たのではないだろうか。

今回は装備が無く下部へは降りられず、滝の全貌を望むことはできなかった。が、これで充分。荒川源流への興味と想いは益々募るばかりだ。